

多摩川流域のオオタカの生息状況の 実態調査とその保護策に関する調査研究

2000年

尾崎 洋

東京オオタカ保護連絡会会員

目 次

1. はじめに一里山とオオカ	1
2. 多摩川流域の里山とオオタカ生息地の分布	2
3. オオタカの営巣環境調査結果	3
4. オオタカの生活環境としての里山	6
5. オオタカ保護策としての里山プロジェクト	7
資料 オオタカの生活環境の写真集	11

多摩川流域のオオタカの生息状況の 実態調査とその保護策に関する調査研究

お 尾 ざき 崎 ひろし 洋

東京オオタカ保護連絡会 会員

1. はじめに一里山とオオタカ

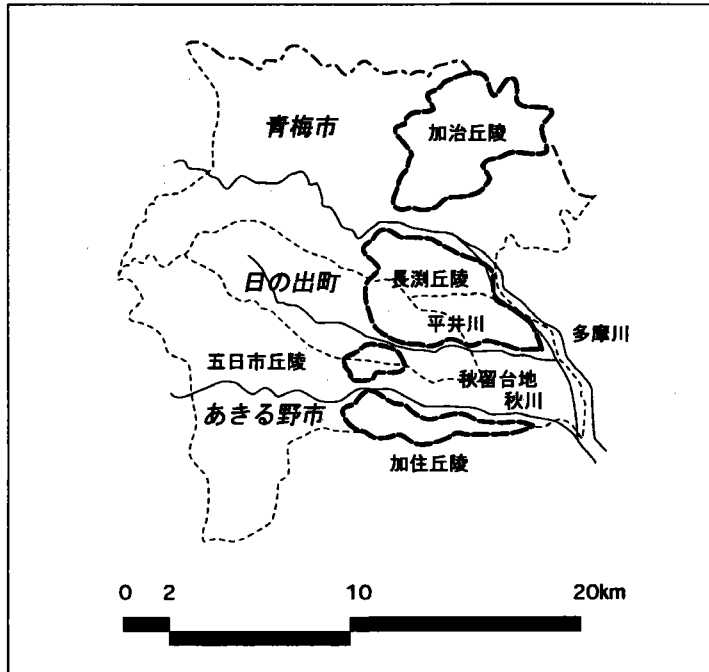
オオタカは美しく気品に満ちた勇壮な鷹で、古来鷹といえばオオタカを指すといってもよいほど人々に珍重され、愛好されてきた。多摩川の中流域に位置する西多摩地域においては、丘陵部に広がる雑木林がオオタカの生息地となっていて、オオタカを食物連鎖の頂点とする野生動植物の豊かで多様な生態系を形作っている。この生態系を里山と呼び、この地をオオタカと人が共有し、この地で共生してきた。

しかし、人は今この里山とオオタカを見捨てようとしている。かつての里山経営は放棄され「開発」の名の下に雑木林の山は削られ、谷は埋められて姿を消しつつある。オオタカもまた繁殖や生息の場を奪われ、絶滅のおそれが増大している。

オオタカは、環境庁の「レッドデータブック」の中で「絶滅危惧II類」（絶滅の危険が増大している種）とされ、さらに「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」により、「国内希少動植物種」に指定されることにより、個体および生息地が国レベルで保護されている。しかし、今なお不法な密猟が後を断たず、また里山の開発によりオオタカの生息環境が悪化しつつある状況は改善されていない。国や自治体、地元住民や市民が連携して、オオタカの保護策を策定し実施することが緊急の課題である。

2. 多摩川流域の里山とオオタカ生息地の分布

多摩川中流域の西多摩地域におけるオオタカの生息地は北から加治丘陵西部・多摩川・長淵丘陵・平井川・五日市丘陵-秋留台地・秋川・加住丘陵北部を含む地域であり、行政的には青梅市、日の出町、あきる野市からなる（図1）。

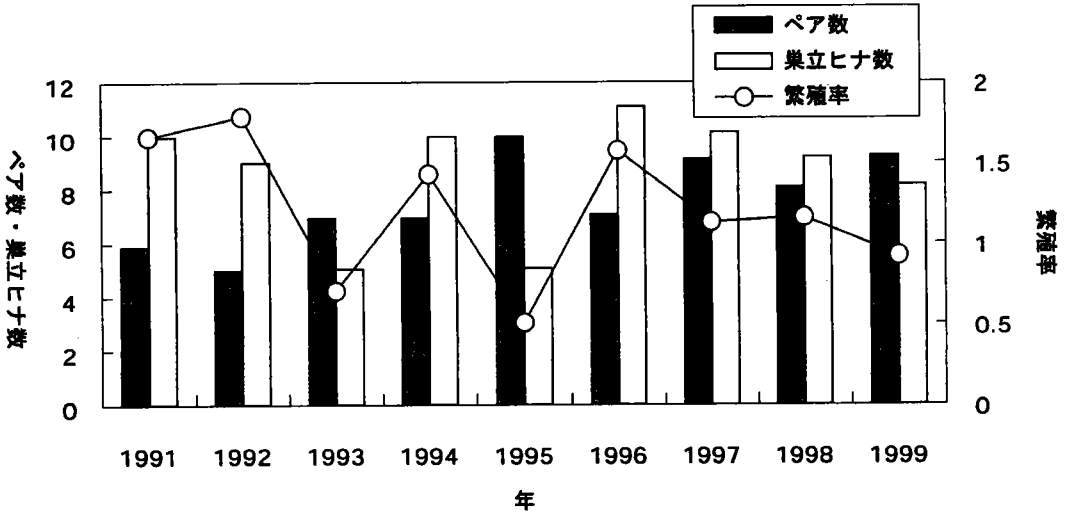


<図1> 西多摩地域のオオタカ生息地

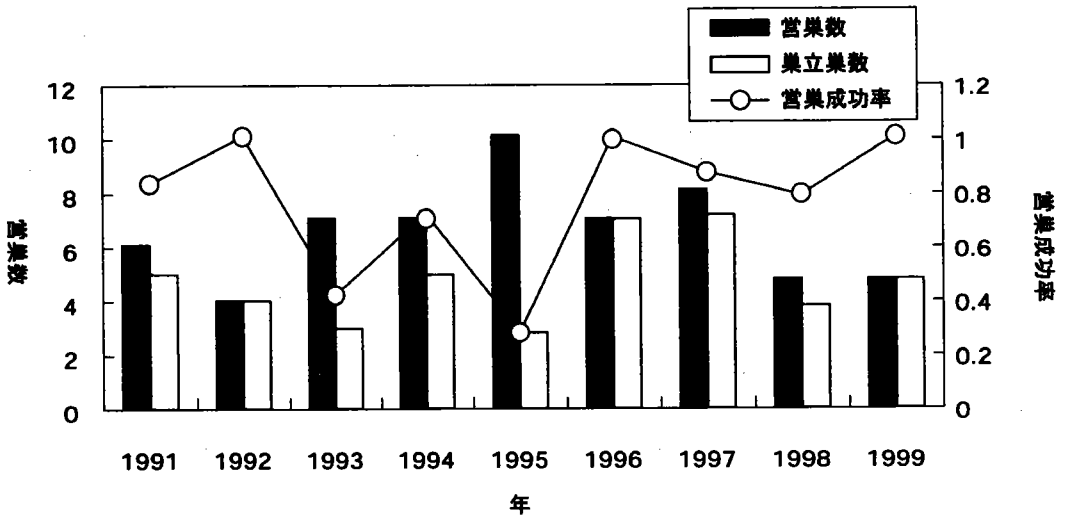
ここには約10ペアのオオタカが生息し、毎年10羽前後のヒナが巣立ちしているが、ここ3、4年は繁殖率（巣立ヒナ数／ペア数）は減少傾向にある（図2）。

次に営巣状況を見ると、営巣に入った巣の数はここ3、4年減少傾向にあり、全ペア数の約半数にまで低下している。一方、営巣成功率は80%以上と安定している（図3）。1993年と1995年は密猟や営巣地への人の立入りによる営巣妨害が多く見られた年で、営巣成功率が大きく落ち込んだ。その後営巣成功率が回復したのは、こうした人的な阻害要因が減少したことによるものと考えられる。

営巣成功率が高く安定しているにもかかわらず、営巣数が低下していることがオオタカ



<図2> 西多摩のオオタカ繁殖状況



<図3> 西多摩のオオタカ営巣状況

の繁殖率の低下をもたらしている一因と考えられる。営巣数の低下には①営巣木を中心とする「営巣中心域」の環境悪化、②狩場、調理場、見張場。回廊などの「高利用域」の環境悪化、③オオタカ個体群の健全度の低下、④環境汚染の深刻化などが考えられる。以下に、我々が実施した営巣環境調査の結果に基づき営巣木周辺の環境特性を検討してみたい。

3. オオタカの営巣環境調査結果

オオタカ営巣地の内16ヵ所の営巣木とその周辺区域について営巣環境調査を実施した。

営巣木を中心に半径11mの円の内側約 380 m²を調査区域とし、調査区域内にある高さ5 m以上の樹木すべてについて樹種、樹高、胸高直径を、さらに5 m未満の樹木や下草については優占種を調査記録した。また、営巣木を中心とした地形や沢、歩道、車道、人家までの距離などについても調査した。調査結果は次表に示す通りである。

営巣木として利用されるのはモミ・スギ・アカマツの針葉樹が90%近くを占め、特にモミが50%以上であった。営巣木の80%以上が胸高直径40cm以上の大径木で、樹高も20m以上の高木であった。巣の高さは地上から10~15mが60%以上、残りは15m以上と中~上部を利用していた。

営巣地の森林タイプとしては、針広混交林から成る植林~二次林で約70%を占め、残りはスギ・ヒノキの植林であった。特に、No.9は非常に手入れの行き届いた平地~丘陵のスギ植林であった。

<表> オオタカの営巣環境調査結果

営巣木 No.	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5
営巣木 樹種	スギ	コナラ	モミ	モミ	モミ
胸高直径(cm)	52	18	55	40	60
樹高(m)	25	20	26	28	18
巣高(m)	20	18	23	23	10
高木層 本数 (10m以上)	25	35	19	30	23
1位	ヒノキ	コナラ	ソロ	ヒノキ	スギ
2位	スギ	ソロ	コナラ	モミ	コナラ
3位	—	サクラ	モミ	—	クヌギ
亜高木層 本数 (10m未満)	1	48	2	0	24
1位	スギ	ソロ	ソロ	—	ヒサカキ
5m以上) 2位	—	アオハダ	—	—	ソロ
3位	—	ハゼ	—	—	マルダモ
低木層 1位	ナンテン	シノダケ	フジ	ヒサカキ	ヒサカキ
(5m未満) 2位	ハナイカダ	ヒサカキ	モミ	アオキ	—
3位	チャ	モミ	—	アラカシ	—
草本層 1位	ジャノヒゲ	—	ジャノヒゲ	ジャノヒゲ	ササ
2位	ヤブラン	—	—	ヤブコウジ	—
3位	シダ	—	—	—	—

営巣木No.	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10
営巣木 樹種	モミ	スギ	コナラ	スギ	モミ
胸高直径(cm)	57	44	23	44	70
樹高(m)	22	20	17	27	25
巣高(m)	11	10	11	19	15
高木層 本数 (10m以上)	10	17	21	27	20
1位	ヒノキ	スギ	コナラ	スギ	スギ
2位	モミ	ホウ	ケヤキ	—	ヒノキ
3位	—	—	サクラ	—	モミ
亜高木層 本数 (10m未満)	4	8	17	0	15
1位	モミ	シラカシ	リョウブ	—	ヒノキ
5m以上) 2位	ヒノキ	アオダモ	ケヤキ	—	ツバキ
3位	—	スギ	サクラ	—	カシ
低木層 1位	ヒノキ	アオキ	シノダケ	—	ヒサカキ
(5m未満) 2位	スギ	シノダケ	モミ	—	ツバキ
3位	—	—	ツゲ	—	カシ
草本層 1位	ヤブコウジ	シダ	ササ	ササ	ジャノヒゲ
2位	リュウノヒゲ	—	—	ジャノヒゲ	ヤブコウジ
3位	—	—	—	シダ	シダ

営巣木No.	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16
営巣木 樹種	モミ	モミ	モミ	モミ	枯アカマツ	アカマツ
胸高直径(cm)	51	62	50	51	39	28
樹高(m)	32	30	28	26	23	20
巣高(m)	13	14	15	22	15	13
高木層 本数 (10m以上)	17	26	64	18	19	31
1位	モミ	ヒノキ	ヒノキ	ソロ	アカマツ	コナラ
2位	ミズキ	ソロ	モミ	モミ	エゴノキ	アカマツ
3位	ソロ	コナラ	アラカシ	コナラ	アオダモ	ネジキ
亜高木層 本数 (10m未満)	22	67	9	84	9	60
1位	ソロ	ソロ	ヒノキ	ソロ	コナラ	コナラ
5m以上) 2位	アラカシ	アラカシ	アラカシ	コナラ	リョウブ	リョウブ
3位	リョウブ	コナラ	コナラ	アオハダ	エゴノキ	ネジキ
低木層 1位	シラカシ	アオキ	アラカシ	モミ	ヒサカキ	ヒサカキ
(5m未満) 2位	ヒサカキ	ササ	ツバキ	ウツギ	—	ササ
3位	モミ	ヒサカキ	アオキ	ヒサカキ	—	ツゲ
草本層 1位	ササ	リュウノヒゲ	ヤブコウジ	リュウノヒゲ	—	—
2位	リュウノヒゲ	—	リュウノヒゲ	シダ	—	—
3位	ヤブコウジ	—	シダ	—	—	—

樹林密度については、380㎡あたり高木・亜高木合わせて50本以上（仮に高密度林と呼

ぶ) が 5 ヲ所 (約30%)、50本未満 (仮に低密度林と呼ぶ) の比較的林間が開けていたのが11ヶ所 (約70%) であった。高密度林の内、No.11以外は高木より亜高木の方が多し若い雑木林であった。低密度林はモミまたはアカマツが唯一の針葉樹高木である雑木林または植林であった。

営巣木は沢の急斜面にあり、No.12以外は斜面中部から下部にあった。また、斜面の向きは東～南東～南西～西南西の範囲内で、南向きが多かった。営巣木から歩道までの距離は全て50m以下で、人家のある一般生活道までの距離は、100m未満が 2 ヲ所 (約10%)、100～300mが 9 ヲ所 (約60%)、300m以上が 5 ヲ所 (約30%) であった。

以上から、オオタカの営巣地の平均像として「300m程度と比較的人里に近い丘陵地の沢斜面で、林内が比較的開けた針広混交林から成る植林～二次林でモミやアカマツなどの針葉樹の大径木に営巣している」姿が考えられる。

4. オオタカの生活環境としての里山

オオタカが住む丘陵部は、コナラを主な樹種とする雑木林、スギ・ヒノキの植林、谷戸田からなる里山であり、かつては林業、シイタケ栽培、炭焼き、水田耕作等が行われてきた。特にシイタケ栽培のため定期的な雑木林の伐採更新は、様々な生育段階の雑木林の多様性が維持され、キジ、コジュケイ、キジバト、カケスなどの野鳥やノウサギ、リス、ネズミ類などの哺乳類を含む良好な狩場を出現させ、オオタカの繁殖率を向上させた。またオオタカの捕食圧により生態系の健全なバランスが維持され、里山経営にも寄与する形でオオタカとヒトとの共存が可能であった。

西多摩地域は、丘陵部を中心に里山生態系がまだ残されている地域である。先に述べたオオタカ営巣地の特性は、よく管理された里山の特性でもある。我々が実施したオオタカの定点観察による行動調査や食痕等の踏査調査、主な餌である鳥類調査の結果も同様にオオタカの生活様式が里山の特性に良く適応していることを実証するものであった。

現在、オオタカの繁殖率が低下し絶滅の危険が増大しつつあるのは、里山が放置され、里山生態系が崩壊しつつあることが重要な一因と考えられる。したがって、オオタカを保護するためにはこの里山生態系を回復させ、維持・管理していくことが必要である。

5. オオタカ保護策としての里山プロジェクト

我々はこれまでの調査結果を踏まえて、以下のようなオオタカ保護策を提案をしたい。

- (1) オオタカの営巣中心域である営巣木を含む丘陵沢部（営巣谷）は、自然環境の改変や人の立入り制限区域として、オオタカの繁殖を最優先とする自然環境保全地域とする。
- (2) オオタカの行動圏の内、高利用域としての営巣谷周辺の狩場・調理場・見張場・回廊などは、自然環境更新・管理区域として、オオタカと人とが共生する里山生態系の維持・管理を行う。
- (3) 高利用域の外側に広がるオオタカ行動圏は、オオタカの生活に支障を与えないような形での自然環境活用区域として、避難所や回廊により他の高利用域と連結し広域的にオオタカ個体群をネットワーク化し、オオタカと人との共生社会を構想する（開発の規制もこの中で位置付ける）。
- (4) 里山生態系の維持・管理のために、市民ボランティアを中軸とする「里山プロジェクト」を立ち上げ、広域的な里山ネットワークを構築する。

西多摩地域の里山では農業や林業の不振などにより個々の土地所有者に依存する里山経営は限界に達している。したがって里山の維持管理には、地元・行政の限界を越えて広く市民の参加協力が必要であり、そのための新しいシステムを創造していく必要がある。

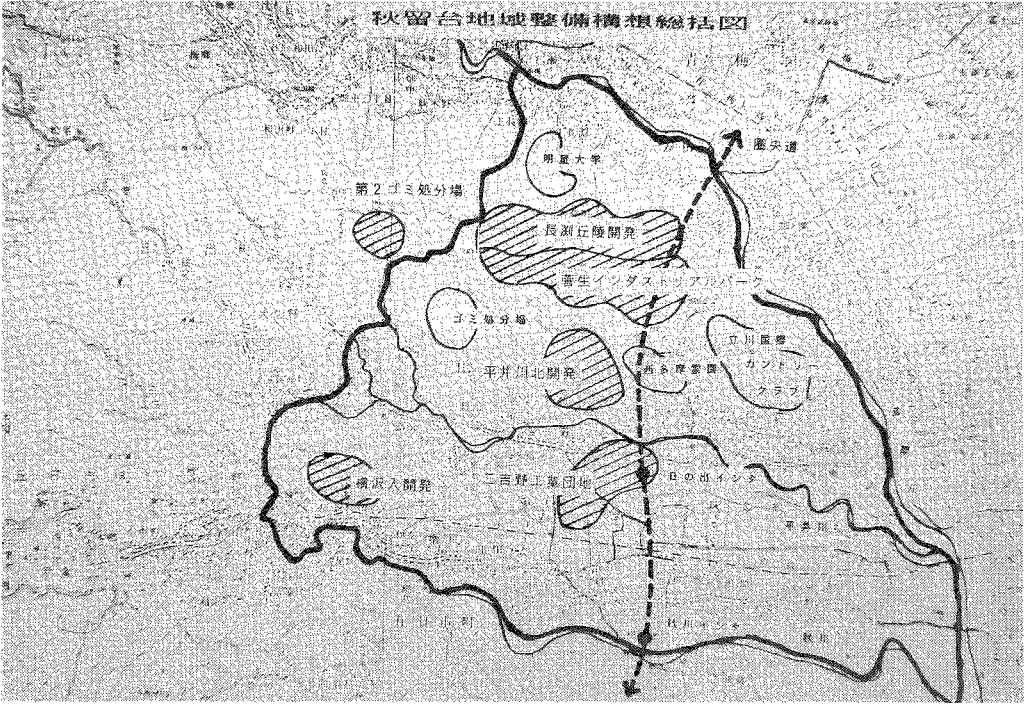
一方では、市民ボランティアにより里山生態系を復元・維持していくための方法が模索されている。例えば、谷戸田や雑木林を復元し、炭焼き体験や環境教育、リクリエーションの場として里山を活用していく種々の活動が広がっている。

里山の行政による買い上げも含めた施策により里山を自然保護区や自然公園などに指定

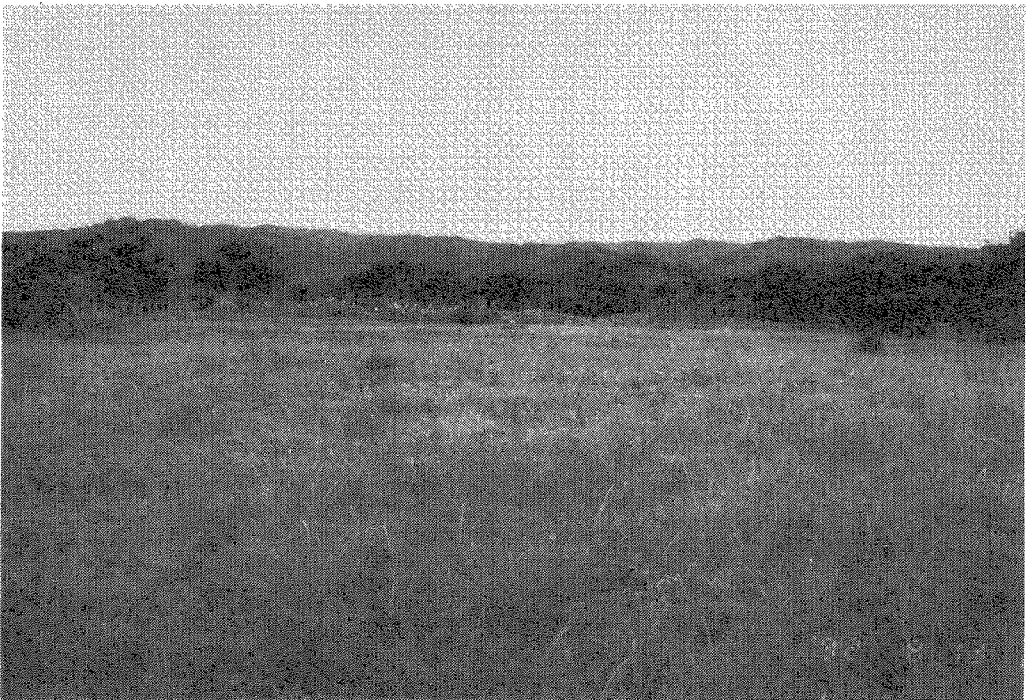
し、ボランティア活動を組織化して里山生態系を恒常的に維持・管理していく里山プロジェクトが考えられる。オオタカ保護策はこの里山プロジェクトの一環として具体的方策が立案され、実行されなくてはならない。

資 料

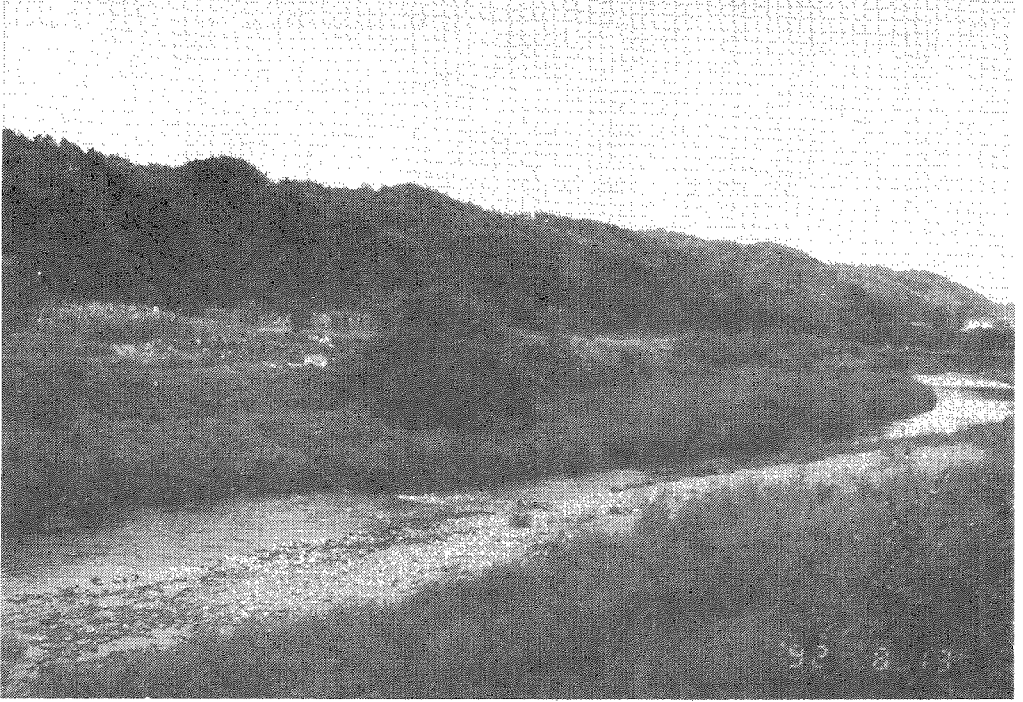
オオタカ的生活環境の写真集



秋留台地域整備構想総括図



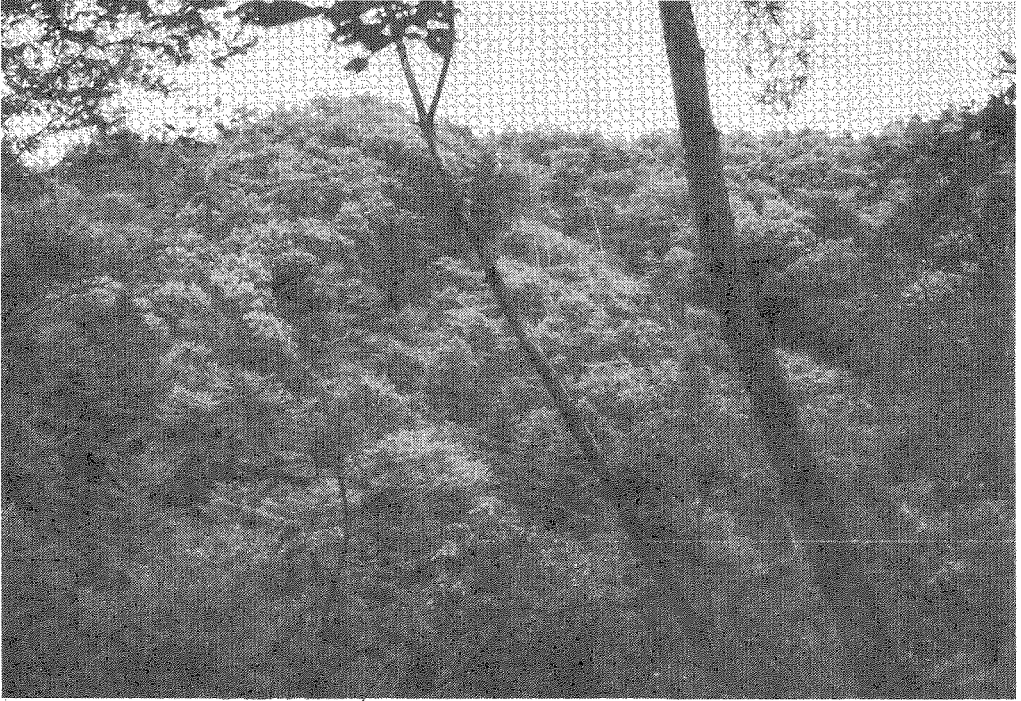
秋留台地からの長洲丘陵遠望



平井川と長測丘陵



オオタカの営巣地



丘陵の伐採跡地



沢の部分のモミの木



営巣木のモミの木



ふ化後3・4週間目のひな



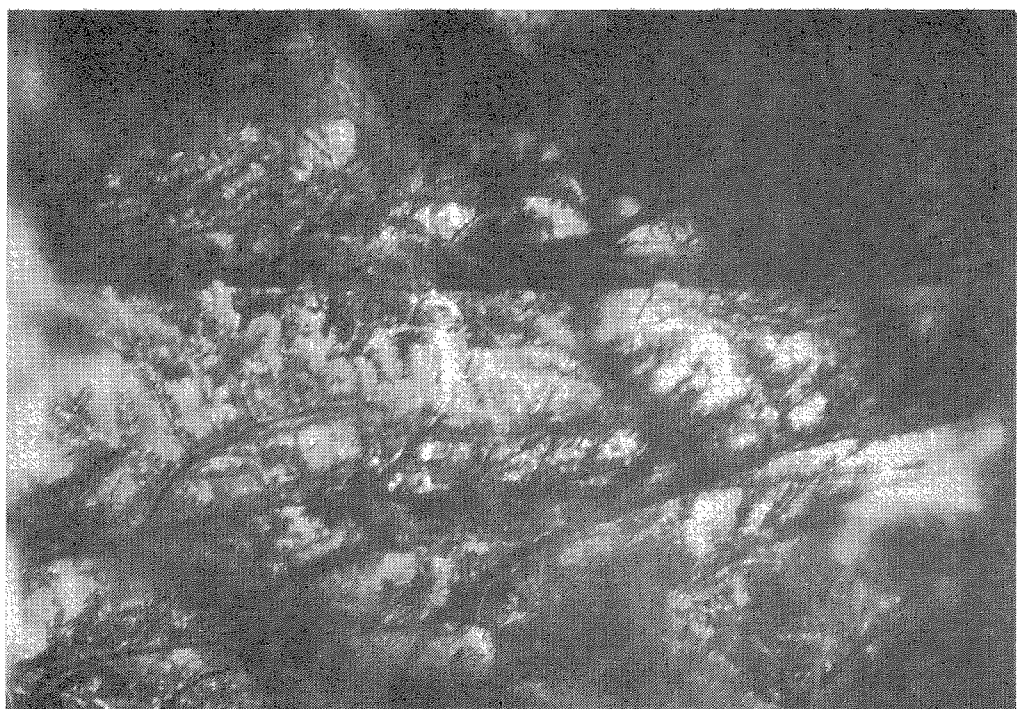
ふ化後2週間ぐらいのひな



親鳥



巢立古直前のひな



巢立したあとの幼鳥



丘陵の中のシイタケ木



丘陵の中のシイタケ小屋

た まがわりゅういき おお た か せいそくじょうきょう
「多摩川流域のオオタカの生息状況の
じったいちようさ ほ ごさく かん ちようさ けんきゆう
実態調査とその保護策に関する調査研究」

(研究助成・一般研究VOL. 22-No.127)

著 者 お ぎき ひろし
尾 崎 洋
発行日 2001年3月31日
発 行 財団法人 とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002
渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141
